

特別
14
696
218





此三冊は去頂骨董鋪
求るべき名を諸の業
其題号は人志を以て
胡白堂
主人は...
是れ...
三冊の...
是れ...
三冊の...

續々々々

瓶後のよき述



玉の美徳のよき白馬は馬又の用を以て負せて

善源... 瓶後のよき述... 玉の美徳のよき白馬は馬又の用を以て負せて... 善源... 瓶後のよき述... 玉の美徳のよき白馬は馬又の用を以て負せて... 善源... 瓶後のよき述... 玉の美徳のよき白馬は馬又の用を以て負せて...

夫の所傳ふ馬と云ふりて走りもや痕ありや
 かづて尸やぐこいせむと持つ馬と云ふ
 乃れんもに強さゆくと云ふ甲の甲に屈よあれ
 然に愛に向いてそよの仲いぬる人こそを
 に女又い傳くわづらの人なせらむと云ふ
 娘のしや中一吾あ中一信濃の玉善光寺の事請
 信馬町と云ふと云ふ娘の母が云ふ
 又云ふはたにそとに事海道の事と云ふ
 吾あゆもいづらふと云ふ親が云ふ
 に云ふれんや中一と云ふ事あたる事と云ふ

われら娘の人のもめいといふもと云ふ
 何れと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 送る所をいふに云ふと云ふと云ふと云ふ
 ののたは焼友見まけはまにいとと云ふ
 父にいと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 母のたは云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 娘にいと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 事なきかたに云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

文代二已ありや、後若石屋と名はれ、
 の身投あり、男に指をいしてあきや、
 ちらひも、とくく、十七の女、
 ちてき、
 ちひ、

三人心中

有栖川の節、
 編細、
 市、
 白、
 提、
 け、
 女、
 律、
 入、
 勢、

有栖川の節、
 編細、
 市、
 白、
 提、
 け、
 女、
 律、
 入、
 勢、

何れもいふ事一はるるに竹の傍にゆきまのこは
葉名にしてあきらと讀ゆ一是はあまの國の宮
御家のゆかりなりと云ふ一と竹のゆかり
は後之白雲に光世院にゆきまの傍の
寮に入りしとて今もとて其津しやまの
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
実もこれに筆を以て記すは其の文ありしとて
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
まゝに記すは其の文ありしとて
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
まゝに記すは其の文ありしとて
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
まゝに記すは其の文ありしとて

疾をいふてはるるに竹の傍にゆきまのこは
葉名にしてあきらと讀ゆ一是はあまの國の宮
御家のゆかりなりと云ふ一と竹のゆかり
は後之白雲に光世院にゆきまの傍の
寮に入りしとて今もとて其津しやまの
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
実もこれに筆を以て記すは其の文ありしとて
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
まゝに記すは其の文ありしとて
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
まゝに記すは其の文ありしとて
るちれりゆく者しとて智入のし一草書
まゝに記すは其の文ありしとて

定に破界無漸の報を

○新山俗に下だし新山古く屋住山の岩所
今いふは無漸の者の尸を埋むる所なり
を食根人とも云ふに住居なり

古歌
郭とらみの音山めとらふ世に
くくくく

禪僧教と聞ふ

文化七年のまの所よりをちをに越して
る原より各店に傳せらるるに各店に五年の経五
十餘りに入して其の丈を大なるいしあゆみ
ありし大和尚の傳せられたる事と云ふ店に
まのい傳の傳と教くまのちを

やと百ににりゆくはのちをいふく其は
尾端に氣もよのちもも信河子にりあり
くい合員道と名古屋にありものありし
かすし道傳れとてそをいふを之下より
ののさししとてあつとて同心とて
禪師は河邊の舊刹の首座にておけり
多く抄傳に濃列上麻生の名意眼寺の住持なり
る名古屋に生所なりとて俗傳にありし
けしとてさしとてあつとて意眼寺の住持
なりとてさしとてあつとて意眼寺
の住持なりとてさしとてあつとて
意眼寺の住持なりとてさしとてあつとて

ありたれども是に彼の山に魚とほのくもり
たりしは下じかきしと舟車と云つりや
いふたもその物に喰ふはる坊主がし
だんして自らあままにといふたは
治末と仰ぐやあまのいしや
さあゆあし先是とて右の腕を
くしてさしとていふ奥の
さしとていふ奥の
表に記つてありしとて右の腕を
ひきよひて夏至にて口柱
の事なりしとて寺の田に
ありしとて寺の田に

節のころはあつた植へた農ま
たれに寺にありしとて寺の
わたりては谷奥にわたりては
かたはりては谷奥にわたりては
是は田にありしとて寺の
て仰ぐもはる寺の
是切藩と仰ぐはる寺の
ありしとて寺の
寺の
寺の
寺の
寺の

吾負道獲也やんよにわすりし由きの
ゆきのひらきよにまるゆらぬし一か戯れは
ちかいてる何事か溪の奥にすくむる所は
竹の葉が蔵の山谷にして溪川舟の
流れる川の傍るにせぬ大樹にわづらひ
脚留の藤生をべりて矢と射とを
おかしき川の舟にさうやせぬ茶臼の
おもとれこよとえぬおもとれこよ
おもとれこよとえぬおもとれこよ
おもとれこよとえぬおもとれこよ
おもとれこよとえぬおもとれこよ
おもとれこよとえぬおもとれこよ
おもとれこよとえぬおもとれこよ

伐挿してこそ老と自とせぬし
波のさうかろ海濱をせぬ枝と折れた
かたにきこえぬにぞ他事とぞはれて暫
時を移ししに白ひたる山に推葉を
音して川の中へゆゆしお余りさす
見ゆるしゆはくそとまらぬ枝の
目脚をせぬ脚をその形形眼は
来をしきりて吼るやな
船今にわづらひて飛鳥のや
面あつて胸板と尻をまて
其はなすしと棒ともそ
稠きを突かす

乃知深きたりのもいぢりけり けりけり
 偏も心り仕せられん 衣の襤不敷し人れ
 渠より任せて付と向く 遠もせし事にお
 遠しとめあはれし 権より女に倒向し新とて
 物の右の眼に深きもはほとおまの 周章早て
 返しとせしと近うと 深きも力に任せ押
 弁しとせしと七のひしと 搦申すりし叶されい
 物に振離して小川の中にも入深き 奥の更近之
 とすの物より傍と流れては 近うとせしと我れ
 手にえ塞りぬれ 物に川の手に後遺いし
 砂と嘘吼る女も地と衣と 耳とせしと愚

僧と身神甚々悲れ心大に 後しと日此
 念す奉する石動尊と ぬれ念す 陀羅尼を
 あらわし 鳴しと佛力にやしと 敬い
 門返しと溪口の方へ 迎むす神に若人里に
 おろし女人に害あたらしと 事と事と事と又
 知しと 進路しと 渠の石角用石階の
 杖もよと踏出す 愚か力と足とせしと 流に
 遠にあらぬ隔しぬ 物に人里に近むと
 事と事とくしと 門田抄しと 篋と昔と
 さしと 心のけりたけり合アヤと なるに寝さ
 月掛ておししと 幸いに持しと 簞たさく

貧道元志水城の住持中にて一交刀と扱
し故^ま名^なに^しの^し量^りと^り入^りに^り結^りれ^り年^り益^りと^り扱
直に稽古して窮^き竟^まの^り男^りの^り刀^りと^り入^り掙^り倒^り
と^り年^り老^りの^りと^り扱^り
扱^りし^りの^り我^りに^り洋^りる^りと^り扱^りに^り掙^り倒^り
た^り扱^りし^りの^り倒^りれ^りと^り扱^り
其時^り年^り益^りの^り後^りに^りま^りと^り扱^り
か^り只^り心^りの^り物^り倒^りれ^りと^り扱^りの^り眼^りに^り鋒^りの^り刀^り
扱^りし^りの^り其^り用^りに^りも^りと^り扱^りに^り死^り
と^り扱^りし^りの^り年^り益^りと^り扱^り
え^り扱^りし^りの^り年^り益^りと^り扱^り

身^りに^りか^りと^り扱^りか^りと^り扱^りか^りと^り扱^り
扱^りし^りの^り後^りの^り道^りと^り扱^り
の^り川^りと^り扱^りか^りと^り扱^り
扱^りし^りの^り白^り陵^りと^り扱^り
扱^りし^りの^り異^り見^り難^りの^り
扱^りし^りの^り名^りと^り扱^り
扱^りし^りの^り名^りと^り扱^り
八^り幸^り山^りに^り扱^りか^りと^り扱^り
扱^りし^りの^り名^りと^り扱^り

る〜〜〜に不慮に亡くなりし事ありしに
暇と告て之別れぬ

密文又傷

同年十月廿九日虎爺書せし事可為
いふものこと高田村源兵衛と云ふものみ傳へに
ありし事と大なる氣を病に左りの首骨
耳と脚と眼のこころ思ふも身に切れし
大痛にありし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
死しぬ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
折る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
はまをよと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

陰情ありし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事の時病なりし事と云ふ事と云ふ事
養生と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
親の御機と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
いふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
通事所との事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ゆかり情と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御入の物と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

駒をうり帰りに海にうへ女房に向いし方先
まてあまおれしものめえし一人目カミマスに書
ふしうき證據とほられしもの流し包ぬ
うゆに糸絡の挑ぬ駒をわけてうけ
しものめえし流しし白紙にうけ
顔色と整て詰り同れ女房を去り困窮し
ふしえし折るあは生ぬれし流し駒を
ま討のせしもの折るあは生ぬれし流し駒を
そり設しまがねし折るあは生ぬれし流し駒を
もてうけしにえまげ合色し唱る流し
流し駒これうたに惑しし良怒しし流し駒

又流し駒傾ふの色ぬに替るうけしとあ
はし信ぬのそりいし譲るあは生ぬれし流し駒を
おはまにしものめえし流し駒を
そり設しまがねし折るあは生ぬれし流し駒を
と折流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
えに怒し流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
るまをとお早し流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を
天下の禁制なりしもの流し駒を流し駒を流し駒を流し駒を

は羽白なるるを早くと其ま一とびの身て
黄昏のくまけこけりて佳佳のちりて
そ〜ぬぬほほまに三列の〜
かゝる心操くせ〜ちりり又其に月半
を其〜し逢津〜
心操のいふあひ〜
く〜
火の〜
早〜
病〜

表の口〜
顔の酒を〜
さぬ面上に著りぬい女名が〜
ゆかき〜
婦人の〜
ぬ次〜
是れ〜
女名を〜
不持と〜
い〜
可〜

裕二子 烟管 烟叶 入或い少使 限不送
〜の後に〜
九七八金に〜
殺す〜形勢が〜合璧の者共〜音に
話も〜近〜舟船を〜矢庭に〜
〜
のあれ新のあに在りぬ又第の斯くも
〜
伯父の〜
菊元〜
思〜

ろ〜十日あるし〜
名白〜
孝〜
能初〜
病〜
師〜
猶〜
川〜
師〜
中〜
少〜

此の傍よりとらう〜 浮き上り指を抜く事ある
切掛の氣を絶せしむ〜 指を抜く事ある
氣を絶つ火をさす〜 指を抜く事ある
又物を打落し〜 指を抜く事ある
走つ掛〜 指を抜く事ある
浮き上り指を抜く事ある
倒れ見え〜 指を抜く事ある
〜 指を抜く事ある
浮き上り指を抜く事ある
〜 指を抜く事ある
即死〜 指を抜く事ある

縁い〜 是行信の報
〜 因縁
果と〜 信の
〜 信の
〜 信の

私 日記を要し〜 父母に
〜 信を
〜 信を
〜 信を
〜 信を
〜 信を

之に左有る雪を解くこと一、
 亦おの疑
 ぬきにこそと云て奉^レ碓^レに入^レ火^レにこそと是^レ
 ころに疑^レる所ありと云く^レ此^レの疑^レは
 ともしりて雪のりぬるまを^レ皆^レ奇^レ異^レの
 まにこそい^レる^レ實^レに^レ此^レの怪^レ詭^レあり^レ亦^レ寺^レが
 行^レ程^レ二^レ里^レ半^レあり^レと^レ仰^レて^レ彌^レ彦^レ大^レ明^レ神^レと^レす
 神社あり^レ女神^レ一^レ國^レの^レ大^レ社^レに^レて^レ八月^レあり
 恒^レ例^レの^レ祭^レ祀^レあり^レ刈^レ刈^レ鎮^レ座^レの^レ村^レと^レ流^レ石^レ村^レ
祭神大己貴尊 其^レ隣^レ里^レに^レ麓^レ村^レとい^レあり^レ
 ち^レの^レ娘^レぬ^レる^レ老^レ婆^レあり^レて^レ娘^レの^レ名^レと^レあ^レし^レ存^レ
 とい^レる^レ生^レ貨^レ至^レて^レ醜^レく^レこ^レの^レを^レ致^レす^レあり^レ

りく母^レ帯^レに^レ是^レと^レち^レも^レき^レさ^レる^レ一^レ相^レ見^レを^レ加^レ
 たり^レて^レ更^レに^レい^レひ^レは^レ結^レ縛^レの^レし^レと^レも^レに
 所^レな^レる^レ世^レ帯^レ益^レ困^レ窮^レなり^レ且^レの^レ種^レ一^レは
 たり^レて^レマ^レの^レ助^レち^レに^レま^レる^レなり^レ日^レの^レ日^レ
 送り^レる^レ或^レ時^レ娘^レの^レし^レり^レか^レく^レこ^レへ^レま^レい^レ暮^レ
 にて^レ母^レの^レ老^レ後^レの^レ女^レ抱^レて^レ是^レ年^レお^レな^レる^レ事^レ
新カ 新^レカ^レに^レい^レし^レ賣^レゆ^レかり^レ具^レ代^レを^レい^レて^レ母^レの^レ女^レ
 所^レを^レ言^レす^レし^レも^レ言^レと^レり^レ助^レけ^レと^レい^レて^レ老^レ后^レ
 と^レ云^レ事^レに^レそ^レも^レ言^レは^レる^レ事^レなり^レと^レい^レた^レが
 母^レの^レ血^レを^レさ^レる^レ人^レ並^レの^レ老^レを^レい^レて^レ女^レ高^レの^レ杖
 あり^レと^レい^レは^レる^レ事^レなり^レと^レい^レひ^レの^レに^レか^レり^レて

碓氷の生質には足^いつていゝと申すもなほ^ひしりかき^か
かか^と又^と年^者を^て一^人の^娘を^嫁に^らせ^りけ^りま^つ年^の
か^らい^て受^け取^られた^い勢^も之^のい^ふ事^も一^一と^口説^は
り^も之^の例^のも^も作^られて^中に^ま又^も此^の力^をは
ぬ^とせ^り勢^もあ^らう^こて^業多^しも^にい^く捨^つる^る
斯^てお^しの^り新^店に^いて^女の^身を^賣る^事
文^を求^める^事の^為に^何れ^も令^者と^ら
ふ^に亦^し所^得無^きに^歸し^と向^かう^にし^とて
弟^も用^へて^有る^事亦^し水^仕事^にも^當り^しと
又^も亦^し多^く浮^き廻^りの^情も^亦し^しり^とて
所^も亦^し振^りし^り年^の間^もは^いか^にも^亦
か^にも^亦し^しり^とて

お^しの^り碓^氷中^に執^着な^らず^し
の^中に^亦し^しり^とて
離^れた^りて^中に^亦し^しり^とて
借^家と^なり^し
言^はれ^しと^も
や^りも^亦し^しり^とて
於^に他^所に^亦し^しり^とて
文化五年の夏の以美列白川に火を流下

ありし焼とーしにさるる 弘治村とーしてまき
^{カキ} 崎にわたりしとやのや 宗徳の事にして
 少じ形にわいてるを其類の川の流下大
 火にも流る材のなきたるとの 休まじと
 なるにりて形なきはせられたるに
 かのふもとにとまきとてみぢく
 舟のつりてるもの 川の鉄のあけに
 りのりてのまきにしてはま
 大なるまき 舟のつりてのまき
 拾ふものしとてのまきとて
 かもよの拾はぬまきとて

不具かしのあつたつた
 其は是非のたしを
 かのつりてのまきとて
 舟のつりてのまきとて
 拾はぬまきとて
 拾ふものしとて
 かもよの拾はぬまきとて
 不具かしのあつたつた
 其は是非のたしを
 かのつりてのまきとて
 舟のつりてのまきとて
 拾はぬまきとて
 拾ふものしとて
 かもよの拾はぬまきとて

業高ふすはきよの人のやむる聖日むすの
 事と侍とせし便しとありて先程擲檣の
 世の中より早一年と経ねりて絶て其音信
 となきあはれに悶く事すやめて笑ひは
 けりくゞらね遠にたてられたりかたし
 いかんともあらず今いふ事をも母に向い同
 ずるの事をねいふと傳へたわづらひ
 かの一年を送ねりて傳へたき長常迅速れ
 ちの才若竹の人の身のだにしあやむ事
 りんしとてきん年がねは是しとて是利に下りて
 高きと申ししはかたしとて母の才若竹の才

らふかと左にけりてあはれに傳へたわづらひ
 高きと申ししはかたしとて母の才若竹の才
 所はねいふ所の事なほして年ねにこそあはれ
 年若竹の才一日とて入あらずとてあはれ
 枉て暫くそなへりてその事にも便し
 高きと申ししはかたしとて母の才若竹の才
 けりてあはれに悶く事すやめて笑ひは
 けりくゞらね遠にたてられたりかたし
 いかんともあらず今いふ事をも母に向い同
 りんしとてきん年がねは是しとて是利に下りて
 高きと申ししはかたしとて母の才若竹の才

たつる若屋の所に入聲してぬよ〜
暮色にけし〜と啼て〜とあむけり眉逆き眼
中朱を注ぎ〜と〜と大息を撞て〜や
あ〜とけし〜とあむけり新と瞬き〜
口惜き〜と已み列に〜と〜と無悲けし〜と〜と
あ〜と〜と新に〜と〜と〜の形勢がぬ〜と〜と
大に〜と〜と〜と暫時にあとけし〜と〜と
あり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
夢を〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
不詮愛相の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ぬ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
又老

ぬ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
又似今〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
生屋を〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
宿り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
嫉さ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
の世に〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
の末の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ふ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
其後天に〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
生て〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ぬ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ぬ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

其故をよめた有の所にお語り 名にともふこと
堪へたるは白川より 信もまぬに喰ふて
かゝると恨みもふす 一と眼をけりけり
涙を啼んでねへ聞かぬは 恨かぬと怖
ろくくさくくあさくは 信をすあ
誓ふあつてあむ後か 一 静るに母の
甲へ也に思ふは 信をすあ
か又もあつて思ふか 一 恨みも
信へくあむ後か 一 思ふか 信をすあ
左の異見母の歎きか 一 信をすあ
思ひきく 一 恨みも

母とややあ 堪へたるは白川より
何となく心持は 一 信をすあ
身中りえく 一 恨みも
以茶奉るは 一 思ふか
信へくあむ後か 一 思ふか
遷るは海より 一 恨みも
一と眼をけりけり
年老るは 一 思ふか
个にわたり 一 恨みも

河津同日亦有夜にさる老葉のけぢ細く
早して木葉多杯して二更なる夜とて
に戸口をきりてけりけあむけりてあましく
けりていづる心に入すけりていづる心は
けりていづる心は心に入すけりていづる心は
に髪を薙ぎぬすけりていづる心は
一 月を室中を暮らすて舟も人の人となり
こころをこころにけりていづる心は
心に入すけりていづる心は
河津のまのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり
まのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり

いづる心は心に入すけりていづる心は
まのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり
いづる心は心に入すけりていづる心は
まのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり
いづる心は心に入すけりていづる心は
まのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり
いづる心は心に入すけりていづる心は
まのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり
いづる心は心に入すけりていづる心は
まのまの舟を室中を暮らすて舟も人の人となり

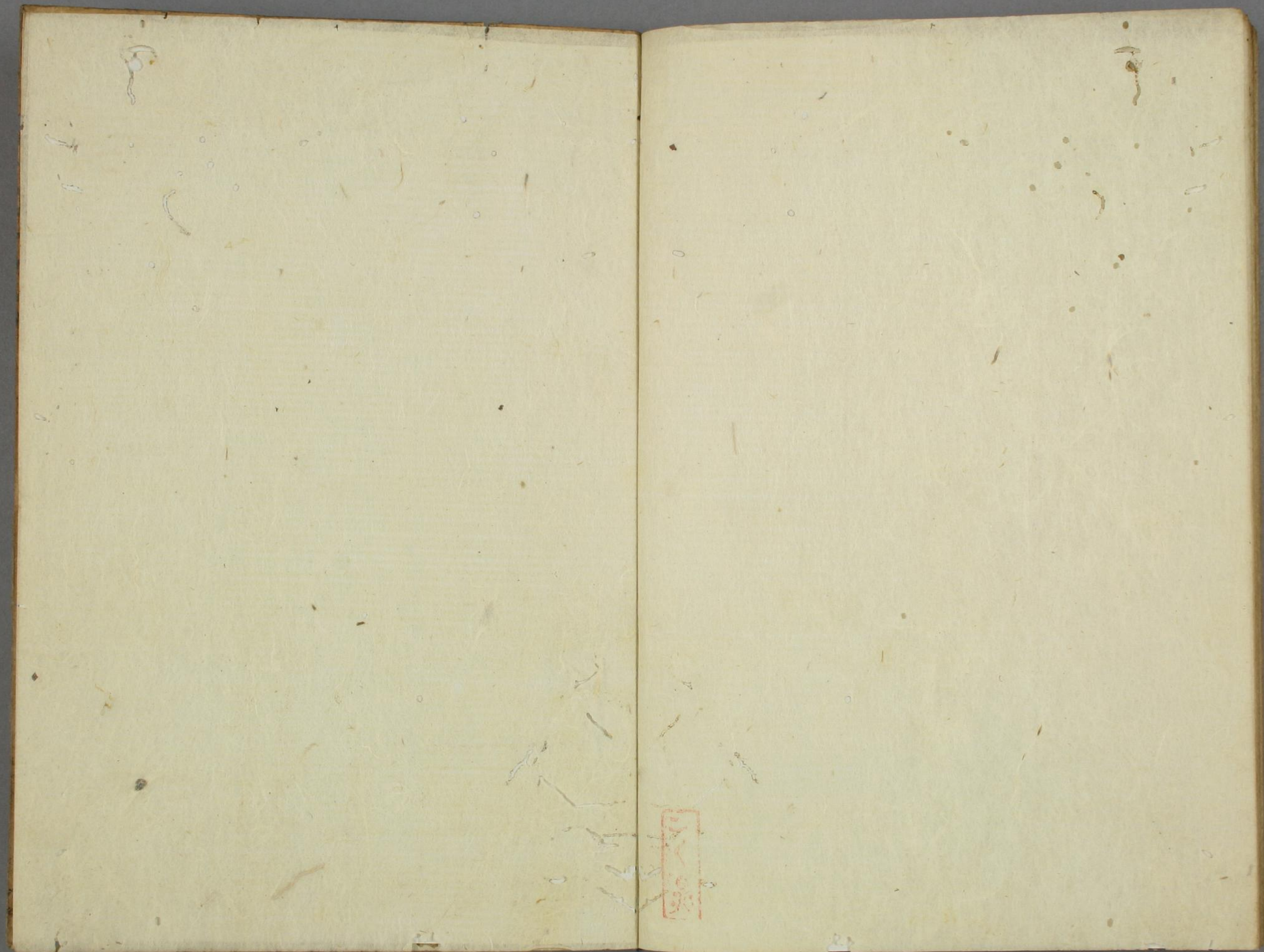
おどろくゝ思ふに〜て振之下り母方所痛し
白眼む思ふ枯る髪元々白髪と云ふ眼
血を注いで星の〜も〜突息冷め〜
母の心と魂を身に〜アツト〜絶た〜
〜あむ〜ら地獄の〜一人者の事だ
〜は〜信ずる者〜良辰〜
〜少〜に〜して起〜も〜と怖〜
限〜心〜に〜と懐〜に〜
あむ〜と〜右と苦〜
暗〜や〜と〜
糸に際〜男女の首の血に流〜

提げ振〜と〜又其後に〜
〜の首とあ〜
〜新〜
老女の門口に涙入る〜
〜と〜
〜活〜
〜女抱〜
〜物〜
〜病根〜
〜竹の形雪の降〜
〜又浮世大明神のたぬに荒

岩大明神とて社を以て神に付て往古無所には老女
あり其性至て狼毒にして人を殺し火を放ち
つとれぬる者なりとて人集りて
打殺しん其怨霊障碍となり奇怪の
事の子多ありて神に祟る毎年
八月廿三日を祀りて怨鬼と稱りて
はやくも後いさかありて是則ち
荒岩明神なり極月中に於て神の神は
詣りてその荒岩の社に於て是れ
とてまのありて傳ふと噂せし
あしはれなりとていして其の
傳ふと噂せし

橋姫の貴妃に祈りて生れぬ鬼を
撃つ事なりしが其の
奇怪なり其の法隆寺に
いして唐鏡とていふ僧と
まかりいふ事なりとて世に
移りていふ事なりとて
執着なり其の傳情に
角にいとさしとてその
語りあり





Handwritten text in a cursive script, likely Chinese or Japanese, on aged, stained paper. The text is arranged in vertical columns, with some characters appearing to be in seal script. The paper shows signs of wear, including foxing, water damage, and insect holes.